

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	戦間期の日仏の内閣制度と運用をめぐる比較史：フランス側の調査
氏名 Name	ラモス マノン ジュリ クロエ
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	法学研究科法制理論専攻 博士後期課程 3年
渡航国 Country	フランス
渡航日程 Travel schedule	2024年3月3日 ~ 2024年4月17日

- ・ページ数に制限はありません。No limits on the number of pages
- ・写真や図なども組み込んでいただいて結構です。You can include pictures or illustrations.
- ・各項目について具体的に記述してください。Please fill in each item specifically.
- ・日本語または英語で記載ください。Please use Japanese or English.

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本研究は比較史の手法を採用しているため、できうる限り同様な種類かつ同量の日仏両国の史料を分析することが望ましい。報告者が修士課程に所属していた時期はコロナ禍の影響でフランスでの史料調査を実施できなかった。昨年度はついに渡仏することが叶い、先行研究の購入、または閲覧と複写ができた。André Tardieu、Edouard Daladier、Léon Blumなどの戦間期において総理大臣または国務大臣を就任した人物の関係文書の調査も実施できた。しかし、これまで報告者が収集してきた日本側の史料と比べて、フランス側の史料に関しては博士論文の執筆に足るほどの十分な調査ができているとは言い難かった。そこで今回の調査では、総理大臣、副総理大臣、国務大臣、内閣書記官長、総理官房長官などを歴任した人物の史料収集を優先的な課題とした。

① Jules Moch 関係文書の調査

1936年に設置された総理府書記官（Secrétariat général de la Présidence du Conseil）の初代長官たる Jules Moch は、翌1937年に総理補佐官に就任した。Moch の史料およびその目録のすべてが私文書として登録されており、閲覧の許可を得るまでに時間を要する。そのため、昨年度の調査の際はこの文書にアクセスできなかったが、その際に閲覧・複写許可の申請を済ませていたため、今回の調査時点ではすでに閲覧許可を得ることができていた。内閣書記官長の始祖とも呼べる総理府書記官は、各省の課題を調整することによって、内閣の一体性を実現・強化させるために設置された。ところが、先行研究では戦間期においては当該目的が達成されず、内閣運用上のさまざまな問題が生じたように書かれている。そこで、Moch 関係文書を収集・分析することによって、その各問題のより具体的な側面を把握し、戦間期のフランスにおける省庁間の連携の欠如やその原因、ないしはそれへの対策の模索を明らかにしたいと考えた。

② Paul Painlevé, Georges Bonnet, Joseph Caillaux 関係文書などの史料調査

1930年代の史料は既に収集済であったが、それに加えて1920年代の総理大臣が他の国務大臣に対して上位にあったか否か、または国務大臣をどのように指揮していたかを検証するために、1925年から総理大臣に就任した Paul Painlevé とその補佐官であった Georges Bonnet の両関係文書を調査する予定であった。また、1926年の第6次 Aristide Briand 内閣の副総理大臣を就任した Joseph Caillaux の史料も閲覧する価値が高いと思われたため、それも調査を行おうとした。

③ 先行研究の購入、読解、複写フランス政治外交史の研究者との面談

最後に、去年に引き続き日本には所蔵のない先行研究を閲覧し、必要な場合は複写するつもりであった。また、フランス近現代政治史が専門の Florence Descamps 先生と、戦間期フランス外交史を研究している Jean-Michel Guieu 先生と連絡を取り、面談を了承していただいた。

以上の計画を実施するために、フランスでの調査を行った。新型コロナウイルスとそれに伴って生じた経済的影響のため、ほとんどの航空会社が航空賃の値上げに踏み切っており、渡航にかかる負担が何よりも大きかった。そのため、DoGS 助成金は主に渡航費に充てた。残額分は一ヶ月の海外研究活動に対するリスク対策としての保険加入、フランス側の先行研究の購入として使用した。本申請に採択されたことで、財政的な懸念から解放されて史料調査に集中することができ、本研究を更に進展させることができた。

成果 Outcome

① フランス国立文書館にての史料調査

フランスの国立文書館においてはまず、計画通りに 1930 年代の Léon Blum 内閣の書記官長を担当した Jules Moch を皮切りに、戦間期の政治家の個人文書を閲覧した。1920 年代をさらに詳細に分析するために、総理大臣や重要な省務に務めていた Paul Painlevé、Joseph Caillaux、Georges Bonnet の関係文書を調査できた。加えて、行政機構・内閣の改革が必要と主張し、その提案を議会に提出した Louis Marin の個人文書と、1920 年代前半に大統領であった Alexandre Millerand 関係文書も閲覧した。最後に、日本との深い関係を持っており、第一次世界大戦以降の有名な憲法学者であった René Capitant の書簡や講義ノートを数点複写した。

② 外務省文書館（ナント市）にての史料調査

次に、ナント市にある外務省文書館に趣き、1914 年から 1939 年にかけての在日フランス大使館史料を調査した。加えて、1920 年代において大使を務めた Paul Claudel と De Martel の回想録や書簡も閲覧と複写した。その各史料を分析することによって、博士論文のみならず、学術雑誌に投稿する予定の論文にも利用できるフランス人からの日本の政治体制への理解や、日仏のアカデミック交流に関する貴重な証拠を発見した。

③ フランス史の研究者との面談

当初予定していたパリ政治学院の Nicolas Roussellier 先生との面談は都合がつかず実現できなかったが、ソルボンヌ大学の Jean-Michel Guieu 先生と EPHE（高等学校実習院）の Florence Descamps 先生と面談し、貴重な助言を頂戴した。Guieu 先生には、主に戦間期におけるヨーロッパ大陸の国際関係、特に講和と不戦条約に至る交渉過程について詳細に解説していただいた。更に、本研究と大きな繋がりのある Aristide Briand が大臣・総理大臣だった時期の動向や戦略についてもご教示いただいた。Guieu 先生には、政治家の伝記のような貴重な先行研究と一次史料はもちろん、研究の方法論に至るまで助言をいただいた。報告者は、昨年度から日仏の単なる比較から分析対象を拡大し、相互の影響関係や繋がりに注目するためにグローバル・ヒストリーや接続史（connected history）の方法を勉強しつつ、それを具体的にどう本研究に活かすかについて思案してきた。これについて、Guieu 先生からはグローバル・ヒストリーの方法によって本研究のオリジナリティが上がるとの太鼓判をいただいたのみならず、戦間期日本とフランスとの接続を分析するためには、国際連盟の国際知的協力委員会（The International Committee on Intellectual Cooperation）を通じた知

識や政治思想の交流も考察する価値が高いのではないかと提案していただいた。それは確かに検討に値する事例であると考え、今回の滞在中にさっそく国際連盟のデジタルアーカイブを調査し始めた。

20世紀におけるフランス財務省の構造的変遷が専門である Descamps 先生には、第三共和政の閣内における財務大臣の優位、総理大臣との兼任、ないしは協力と、予算交渉に辿られた閣内不統一と内閣総辞職に関して、とても興味深いお話を伺った。さらにフランス財務省の文書館 (Archives économiques et financières) の利用方法や、本研究を進めるうえで調査すべきシリーズまでご教示いただいた。最後に、来年度に計画しているフランスでの中長期的な調査滞在についても相談させていただいたところ、Descamps 先生は受入れを快諾してくださった。

④ ソルボンヌ大学図書館にて先行研究の読書

昨年度に渡仏した際はパリ政治学院の図書館に通ったが、今回の滞在中ではソルボンヌ大学の附属図書館を主に利用した。Guieu 先生からお勧めいただいた研究書や、Joseph Caillaux、Raymond Poincaré、Georges Bonnet の伝記、回想録、バイオグラフィに関する一次・二次資料を閲覧した。それによって、博士論文の一つの重要な事例にしたいと考えている財務大臣時代の Caillaux についての情報を収集できた。さらに、フランス国立文書館で閲覧した史料と併せて行う予定の分析も同時並行で進め、その問題に関する博士論文の章の執筆を開始することができた。

⑤ 書籍の購入

最後に、第三共和政の憲法史、政治外交史、ヨーロッパ法制史に関する先行研究を数冊と、一次資料として Léon Blum の『Pour la République』(2023年版)を購入した。

今後の展望 Prospects for the future

① 博士論文の二章以上の執筆

現時点における一番の課題はもちろん博士論文の執筆である。今回の渡仏は、フランス史に関する知識も増え、研究方法や論文構成も考え直すきっかけとなった。収集した一次史料のなかには直接引用できるものも数多く、博士論文の二章以上を早速執筆できると考えている。

② 国際連盟の国際知的協力委員会デジタルアーカイブの調査

Guieu 先生との面談に感化され、国際知的協力委員会における日仏交流を取り扱う価値が高いと考えるようになった。そのため、今後の課題としてそのデジタルアーカイブを調査することにした。

③ 学術論文の投稿

この度で収集した一次資料のなかでは、ナント市の外務省文書館の史料に焦点を当て、特にグローバル・ヒストリー／接続史の文脈に寄せたテーマで投稿論文を執筆するつもりである。具体的な部分は検討中であるが、日仏の接続史に関する発見を報告する良いきっかけになるだろう。

④ パリにての中長期的な調査滞在

一か月半ほどの滞在であったため、数多くの史料を収集し、先行研究も数冊閲覧することができた。一か月半の滞在としては順調に進展したにもかかわらず、まだ調査できなかった史料も多く残っているほか、とりわけ、今回の滞在中に Descamps 先生に勧めていただいた財務省の文書館で調査することができなかった点が心残りである。日仏の接続史

について本格的な成果を挙げるため、さらに様々な史料を収集したり、フランスの研究者との交流を行うべく、より中長期的なフランス留学をする必要があると考えるようになった。そのため、来年度は EPHE にての 4 か月以上の留学計画を立てており、そのための準備を既に開始した。